

乾隆ガラス・博山・鼻煙壺

Ch'ienlung Glasses ・ Boshan ・ Snuffbox

寺井 良平
Ryohei TERAJ

寺井ガラス技術事務所

問合せ/テライ リョウヘイ 〒567-0815 茨木市竹橋町11-11-303 TEL 072-626-9140 FAX 072-626-9140

キーワード：乾隆ガラス，色被せ浮彫りガラス，博山，中国工芸ガラス，鼻煙壺，内面画びん

1 色被せ浮彫り乾隆ガラス

京都・伏見の京セラ本社にある「京セラ美術館」には、かなり多数の「乾隆ガラス」が展示されている。その多くはいわゆる「色被せ浮彫りガラス」(刻花套料・料器彫刻)の逸品で、不透明な白い生地ガラスの上に、赤やブルーなどの色ガラスを重ね、それに様々な深い彫刻を施したものである。これによって下地とのコントラストを際立たせ、一見、中国古来の玉製品のような趣を醸し出している。これはガラス芸術の分野において極めて高い評価を得、遠く離れたアール・ヌーボウのエミール・ガレにまで大きな影響を与えたといわれている¹⁾。図1は多数の乾隆ガラス(色被せ浮彫り)の並ぶ京セラ美術館の展示棚を示している。

清朝第二代皇帝・康熙は宮中・養心殿に「造弁処」という名の工房を創設し、様々な工芸品の製作を命じたが、その工房の一つに工芸ガラスの「玻璃廠」があった²⁾。そしてヨーロッパからの宣教師を指導者として、多くのガラス職人を山東省・博山や広州から招き、旧来の技術と西洋の新技術とを融合した斬新な芸術作品を作り上げた。特に第四代皇帝・乾隆の時代になって、「色被せ浮彫りガラス」の名品が多数世に送り出されたので、今日、清朝時代の作品を「乾隆ガラス」の名で呼ぶことが多い。その後「玻璃廠」は皇帝の離宮「円明園」に



図1 色被せ浮彫りガラス器の並ぶ京セラ美術館(京セラ本社1F)

移されたが、清朝末期に至り、英仏連合軍による徹底的な略奪と破壊に合い、その施設の殆どが失われた。しかし作られた多くの名品は北京や台北の故宮博物院をはじめ、世界各地の美術館に伝わり、わが国でもかなり多数の所蔵が知られる。

その被せる色も、紅、藍、緑、黒、黄など二十種を超え、後代になるほど多数の色を用いたカラフルな作品が見られるようになる(これを「兼料」という)。更に器表面に色ガラスを部分的に溶着する技術(熱貼)も加

解説

わって、一層華やかな作品が出来上がる。また、下地の白にも、真珠白、凝脂白など微妙に色合いの異なる乳白生地が作られ、ますます玉の実態に近づき、その見事さを競うようになる。中でも半透明の下地の白に微小な結晶や気泡を散在させたスノー・フレイクス（雪片）ガラスの登場は大喝采を浴びたようで、これは、今日、骨董の世界でも特に高い評価を受けている³⁾。

初期のガラス技術指導者はイェズス会宣教師らが主体で、その出身地であるオランダ・フランス・イタリアなどの技術が次々と導入された。特に有名なのは中国名・郎世寧（ヴェネチア人・カスティリオーネ）と紀文（フランス人・ガブリエル・プロサール）であろう。郎は画家でもあり、ガラス顔料（エナメル）による磁器の絵付けやシャンデリア（5色のガラス燈籠）の設計などに名を残し、これを実際に製作したのが紀文らであると伝えられる。これら外人の紀文や湯執中（ピエール・ダンカルヴィル）に伍して玻璃廠で大活躍したのが博山出身の崇何福で、乾隆ガラスの最盛期を共に支えたものと見られる。この頃、主力のキャストイング法に加え、吹き竿技法も取り入れられ、次第に洗練されて行ったと見られる。また、硼砂（融剤）、亜硫酸（泡きれ剤・脱色剤・乳白剤）の利用、あるいは金アベンチュリン（金星琉璃）の開発など、今日まで続く新技術が盛んに導入された。崇何福は年間契約でありながら、夏の暑い頃には2~3ヶ月の焦熱休暇を与えられ、博山との往復にも十分な旅費をもらって大変厚遇されたという記録が残されている。彼は郎世寧と共に乾隆帝によって特別に寵愛されたように思われる。

ガラスの製作は前述のように、溶けたガラスを型に流し込んで成形するキャストイング法や粘土の塊の上にガラスを厚く巻き取るサンドコア法が主体で、これが重厚な「浮彫り」を生み出すのに役立ったと思われる。また、色を重ねる技法（「套料」と呼ばれる）には、融けた色ガラスの中に成形したガラス器を浸して外側に色ガラスを付着させる方法から、後には吹き竿技法で色ガラスを2重に巻き取る方法も用いられている。後者の方法は今でも多用されている技術である。

乾隆ガラスの最大の特徴は、表面からの深い彫刻にある。この浮彫り（レリーフ）は先ずガラス器の表面に弓ヤスリ（錐）で小さな孔を連続的にたくさん開けて、次にこの孔を各種のヤスリと金剛砂を用いてつなぎながら、重厚な絵柄を仕上げて行くので、西洋のカメオガラスには見られない非常に深い切り込みを与えることがで

きる。この技法は玉加工と全く同じであるが、玉に比べればガラスは軟らかく、細工も容易で、芸術的に微妙な表現を自由に展開することができたものと思われる。古来中国人は玉（翡翠・大理石・ラピスラズリ・鼈甲・鶏冠石など）を好むが、ガラスによるイミテーション作成は、玉の雰囲気を保ちながら、また陶磁器のような味わいも残しながら、その技法や多色のバラエティに支えられ、多くの貴族に歓迎されたものかと思える。清末、中国においては、この色被せ浮彫り技法は次第に衰退に向かうが、後年、ボヘミアやフランス・ナンシー（エミール・ガレ）において華々しく復活することになる。

2 乾隆ガラスの郷・博山

「造弁処・玻璃廠」に職人を供給した博山は、靈峰泰山の麓にある。ここは現在、中国・山東省・淄博（ツーパー）市の一区となっている。

清朝初期に、この博山のガラス工房の一員であった孫廷銓は、「顔山雜記・琉璃」という貴重な文献を残した。しかしこの文章は非常に難解なので、これを校注した張維用の解説を読むと⁴⁾、元末には既にガラスの生産が行われていたことが分かる。つまり博山は700年を超える歴史をもつのである。また、この書によると、ガラス溶融用の燃料として、この地方に多産する石炭からコークス（焦炭）を作り、これを用いて1000℃（紅光）から1300℃（白光）に及ぶ温度を得ていたことが述べられている。煙の出る石炭よりも、コークスは屋内燃料として優れているし、高温も得やすい。ヨーロッパにおいて、ガラス溶融用燃料として、石炭が用いられるようになるのは17世紀もかなり遅い時期と見られるから、当時、博山はその面でも世界で最も進んだ技術を持っていたことになる。

また、円鉛（鉛丹）、紫石（螢石）、馬牙石（長石）、白雲石（苦灰石）などの原料とともに銅・鉄・回青（コバルト）などの着色剤についても記述がある。溶融技術や成形技術、特に宙吹き法については、鉄杖や口吹き管、鋏などの道具やガラス巻取りの手法も述べられている。更に博山における主な製品に関しては、各種装飾品や念珠、匣碁石、ラッパ（响器）とともに、青簾（珠すだれ）についての詳しい記載がある。これは既に明代から作られていたらしく、わが国南禅寺（京都）にも見事な明代の琉璃燈が保存されている。

聞くところによると、現在の博山のガラス人口（ガラ

ス産業に依拠して生計を立てている人)は優に一万を超えるという。これはガラス工芸で世界に名を馳せるイタリア・ヴェネチアのムラノ島(3000人?)をはるかに越えて、恐らく世界一ではなかろうか。

大正年間にここを訪れた各務鉦三(カガミクリスタル創始者)は、「全村がガラス村といっているほど、各戸に小さな窯が築かれ、各種各様のガラス、例えば色被せガラスに浮彫り文を施した鼻煙壺などが作られていた」といっている⁵⁾。そしてこの時期には、ドイツや日本のガラス技術者も訪れ、炉の改良や板ガラスの生産なども試みられたと記録に見える。私の訪れた時(2003年)も、街中のガラス器を扱う店の棚に、現代風な花器、置物など様々なガラス工芸品と並んで、「乾隆ガラス」のイミテーション、色被せ浮彫りガラス、鶏油黄、鶏肝石、花球、珠簾、珠刺繡(ビーズ編)、料景(ガラス盆景)なども飾られていた。

元々この近辺は、石炭以外にも、ケイ石、石灰石などの窯業原料に恵まれ、セメント工業の大小工場が散在する。省都・済南の大学(工学部学生2万人)には設備の整った「セメント研究所」(済南大学斉銀特種水泥研究所)も存在する。しかし、博山は今日技術革新に遅れをとっているように見える。林立する煙突からは黒煙がもうもうと立ち登り、石炭を燃料とする連帯窯主体のガラス工場は汚れて古い。そこで生み出されるガラス製品も、安い土産品専門の鳥や動物、花器や置物が中心で、乾隆ガラスの面影からは遥かに遠い。上海周辺の先進的な工場と比べるとはもちろん論外ではあるが、その格差はかなりのものと推定できる。働く人の賃金にも大差があるのではなかろうか。内陸の省に比べると、山東省はまだ改革解放の影響を強く受けている地方に属するが、それでも往時のガラス研究所がその活気を失い、技術革新や製品開発、あるいは公害問題などにほとんどその指導的役割を果たしていないことも気にかかる。これは社会主義経済からの過渡期の一時的現象でもあろうか⁶⁾。図2はその博山の一ガラス工場の石炭連帯窯を示す。

一般に工芸ガラスのマーケットは、板ガラスや瓶ガラスに比べると、それほど大きくはない。それでもヴェネチアン・ガラスやボヘミアン・ガラスなどはそれぞれ工芸ガラスの分野で一定の評価を得て、世界市場にそれなりの足場を確保している。しかし博山の場合はその名を知る人も少なく、欧米や日本の土産物下請け工場と化している感じがする。中国のガラス産業(板ガラス・瓶ガラス・電器用ガラス)の伸び率は現在ダントツで世界一



図2 一日の作業を終えた石炭燃料の連帯窯(博山双興玻璃工芸品廠)

位であるが、地方にある嘗ての工芸ガラスの中心地・博山にはまだその恩恵は及んでいない。「乾隆ガラス」の栄光を如何にして取り戻すか、これは博山に課せられたこれからの大きな課題であると思われる。

3 鼻煙壺・内面画ガラスびん

乾隆ガラスの主力製品に「鼻煙壺」(鼻烟壺)と呼ばれる一群のガラス器がある。これは「嗅ぎタバコ」(鼻烟草)の粉末を入れる容器で、外国からの賓客への引き出物として珍重され、また方々に下賜されたことが記録に見える。

清朝における「嗅ぎタバコ」(スナッフ)の風習は、ヨーロッパ、特にフランスの影響を受けたもので、当時、ヨーロッパの上流社会では、ルイ13世の強い指導力もあって、鼻から煙の出るタバコが厳禁され、代わって嗅ぎタバコが推奨された。以後ブルボン王朝を中心に、周辺諸国の貴族を巻き込み、この風習が蔓延し、それがまた様々な各種宝石で装飾された「嗅ぎタバコ入れ」の名品を生み出すことになる。その豪華な「嗅ぎタバコ入れ」は今も方々の博物館の展示棚を飾っている⁷⁾。

この風習はロシアのロマノフ王朝にも波及し、エカテリーナ女帝は、嗅ぎタバコ愛用者の特権であるクシャミをいつも繰り返していたといわれる。ところでロシアの小説家・ゴゴリの「鼻」や「外套」などにも、しばしばこの「嗅ぎタバコ」が登場する。ここでは庶民もこれを愛用する様子が描かれており、既にこの頃にはかなり下々の民衆に至るまで「嗅ぎタバコ」の習慣が及んでいたことを物語る。しかし、フランス革命の折には、いわゆる宮廷派は「嗅ぎタバコ」を、これに対抗する革命派

解説

は「葉巻タバコ」を用いたため、人によっては、この革命を「タバコ戦争」と呼ぶ⁸⁾。今日「嗅ぎタバコ」は昔の勢いを失っているけれども、「嫌煙」運動の煽りを受けて、やや復活の兆しも見られる。ただ直接鼻腔に塗りつける場合には、発ガンの危険性も指摘され、わが国では余り店頭に見られない。

清朝における「鼻煙壺」も、当初は、やはり清朝・貴族（満州族）のステータス・シンボルであったと見られる。特に満州族は馬に乗る風習があり、そのためタバコを喫するにも、煙管や葉巻では不便なため、鼻に塗布する「嗅ぎタバコ」が用いられたものと思われる。彼ら騎馬民族は大きな「打ち掛け」（袍褂）を着て、腰にベルトを巻き、それに七件頭あるいは九件頭と呼ばれる小道具（櫛、めがね、時計、扇など）をぶら下げるのが一般的であった⁹⁾。その一つに「鼻煙壺」があった。綺麗な袋などに入れて腰に吊ったものらしく、その意味では、わが国の「印籠」や「刻みタバコ入れ」に似ている。

京セラ美術館にも多数の鼻煙壺が展示されている。それも大きく分けると、「色被せ浮彫り」と「内面画」の2種類になる。何れも皇帝が外国からの賓客や高級幹部への祝日の下賜品、あるいは「科挙」合格者への賞品として多量に生産させたもので、今日、北京・故宮博物院に多数所蔵されている。また周辺国にもかなりの数が流出し、わが国の骨董市にもしばしばそれが登場する。インターネットの「楽天」市場にも手頃な値段で売りに出されているのが見受けられる。しかしその「色被せ浮彫り」の逸品の殆どは、乾隆時代の作品に限られるようで、これには驚くほどの高値がついている。

清朝も後期になると、その鼻煙壺に「内面画」の手法を用いた珍品が続出する。これは先ず小さな透明ガラス瓶の内面を金剛砂でマット化し、この瓶内面に、先の曲がった小さな細竹筆を用いて、山水花卉や人物禽獣を画くのである。ポケット・サイズの工芸品として人気があり、多くの名人が輩出した。これは今日でも人気のある工芸品の一つである。

人の集まる盛り場や観光地の土産物店には、この内面画鼻煙壺が山と積まれている。図3は上海・豫園の土産物市場に並ぶ鼻煙壺を示しているが、おおよそ100~200元ほどの売値がついて、無造作に並べられている。日本円にして1500~3000円といったところであろうか。

博山のあるガラス工房を訪ねた折、私は一人の内面画の名人といわれる人（李同起）に紹介された。奨められた作品はなかなか見事なものであったが、その値が万を



図3 上海・豫園公園の土産物店で売られている内面画鼻煙壺

はるかに超えると聞いて二の足を踏んだ。このような名人クラスの人がこの街には何人もいて、それぞれ工房を経営している。それも戦後初期の古い集合住宅のベランダを改造したと見られる自宅兼作業場が多く、中には一家全員がガラス工房に関連した仕事をもち、住居をともにしながらそれぞれ独立した工芸・加工に従事しているケースもあった。

一部城壁の残る博山の街中では、その道端に人々が群がり、野菜や食料品を盛んに売り買いしている。スーパーやコンビニを余り見かけないから、この道路の自由市場が人々の台所と直結しているのであろう。そこにはいつに変わらぬ庶民のすさまじいエネルギーが感じられた。

[参考文献]

- 1) 土屋良雄(著)・藤森武(写真):「中国清朝のガラス」紫紅社(1989)
- 2) 張維用(寺井良平訳):「清宮造弁処玻璃廠」Glass No.42(1998)
- 3) 由水常雄(編)「世界ガラス美術全集4・中国・朝鮮」求龍堂(1992)
- 4) 張維用:「顔山雜記・琉璃」校注「玻璃與塘瓷」24[6]48(1996)
- 5) 由水常雄:「ガラスの話」新潮社(1983)
- 6) 寺井良平:「博山寸見」Glass Newsletter No.1 日本工芸ガラス学会(2004)
- 7) 宇賀田為吉:「世界喫煙史」専売弘済会(1984)
- 8) コネヌール:「たばこの謎を解く」スタジオ・ダンク・河出書房新社(2001)
- 9) 張維用:「氷花樓詩文集」遠方出版社(1998)
- 10) 中山公男(監修):「世界ガラス工芸史」美術出版社(2000)